
寂しさを埋めてよ

花崎佳帆

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

寂しさを埋めてよ

【Nコード】

N7866P

【作者名】

花崎佳帆

【あらすじ】

強そつに見えて脆い女の子の大胆な恋の話です

今日も携帯のコールで目を覚ました。

遠くで聞こえているような気がするばやけたコールは、鮮明に、大きく耳に響くようになり

やがて自分のすぐ近くでなっているということに私は気がついた。

ピタ、と鳴り止んだコールと同時にうつすら目を開くと

視界に広がるのはホテルの天井で、静かな室内に耳を澄ますと隣からは男の寝息が微かに聞こえてきた。

ああ、昨日は誰と寝たんだけっけな、と自傷めいたことを考えながら携帯に手を伸ばし、ディスプレイ表示を確認した。

着信：斉藤 恵太

私のトモダチ、である。

3〜4回体の関係を持つと、着信が大幅に増えるようになったが私は斉藤に好意なんてない。

私は思いっきり溜息をつき、そのまま携帯をカパツとスライドさせた。

そろそろコイツも切り捨てようかな、なんて考えながら。

酷い女だっけ？ それは自分でも重々分かっている。

でもどうでもいいのだ、自分がどんな女でも、周りからどう思われよう

そもそも私は何となく生きているだけなのだから。

しかし、私の容姿はどうやら何となく、のような言葉では済まされないようである。

程よく大きい、形のよいバスト、大きくくびれのついた腰、ウエスト。

パッチリとした大きい目とスーッと細く伸びた鼻筋、卵のような輪郭。

町ゆく男共に何回二度見をされただろうか、女に何度妬まれただろうか。

ごく普通のルックスに生まれたって私は別に良かった。

そんなものよりも周りの人々から与えられる愛情のほうが、遙かに重要と捉えるから。

私は青崎メイという。

メイ、というのが片仮名なのは、名前に意味を込めようとはしなかったからだそうだ。

酒で酔っぱらった父がすっかり、口を滑らせてそう言っていた。

そんな私が5歳になる頃には、父は家にいなかった。正しくは、帰ってこなくなった。

保育所にも行かず、飢えた私の瞳に映るのは、やせ細り、何もかもに絶望したような母の後ろ姿と

腐臭が漂ってきそうな程、廃れきったアパートの部屋の景色だった。

― お母さん、と私がやせ細った母の背中に手をかけると

母は決まってその手を払いのけた。

払いのけられた私の手は虚しく宙をぶらん、と彷徨っていて・・・

その時、どんなことを思っていたかは何故か覚えていない。
でもきつと悲しかっただろう。・・・当たり前だけど。

今となつては、母の背中に手をかけることは、話しかけることすらできない。

母は死んでしまったからだ。

私が8歳の時に、自殺だった。

『お菓子を買っておいで』

と私の手に500円玉を握らせた母は、ごつごつとした手で私を玄関へと送り出した。

そんな風にしてもらえるなんて、何年ぶりかだった私は多分すごく嬉しかった。はず。

残念ながらそのところの気持ちも全然覚えていないのだ。

最後に見た母の顔は、久しぶりに見た母の顔で

まるで骸骨のようにやせ細り、疲れ切ったように笑いながら手を振っていた。

それからは、家に帰ったら鍵がしまっていて、チャイムを鳴らしても扉は開かなくて

私はしょうがなくアパートの管理人さんを呼びに行ったのだ。

スペアキーでギツと不気味に開いた扉からは

暗い室内に、柱からぶら下がっている母の姿が見えた。

ゆらりゆらり、ポタリポタリ、　思い出したくもない。

母の自殺欲は自分の娘への愛情に勝ってしまったのだ。

こんな過去を語ったら分かってもらえと思うが
私は両親のどちらともにも愛されていなかった。

おまけに友達はいなくて、年中孤独だった。

私が一番欲している愛情は、誰からも与えられることはなかったのだ。

だから、とは断言しないが

私は心から人を愛することができない。

だから愛人という愛人ができないし、親友どころか友達もできない。

でも寂しいから男との行為だけを繰り返す。

幸いルックスだけは恵まれているからね。

最低でも何とでも言えばいい、私は自分について考えることに疲れたのだ。

でも、そんな私にも最近気になる人ができた。

その人の名前は大野トモキ。

私がソイツ、大野に抱く感情は他の男とは全く異なるものだった。

その場限りの、寂しさを埋めるための気怠い感情、ではなく
心が暖かみを帯びるような、ポツと色彩を帯びるような。

私にとっては珍しい、プラスな感情だった。

それは「恋」というものなのだと私は自覚している。

私はベッドからのそり、と抜けだし、そのままシャワーを浴びるため

バスルームへと向かった。

気怠くサボりがちな高校も、大野がいると思うと行く意欲が湧いてくるのだ。

私は半分湿った髪のまま制服に着替え、高校へと向かった。
昨日の男と、軽いキスを交えてからね、

私は高校に着くなり、誰とも挨拶を交わさないまま自分の席へと向かった。

大野の席は私の一つ前、ラッキーなことに同じ班なのだ。

若い活気に溢れた、騒がしい教室でただ一人、私は机につつぶした。

――大野は、大野トモキはイケメンと言えるルックスをしている。

垂れ目がちな人懐っこい瞳と、形の良い上がり気味な眉毛はバランスが良くてかっこいい。

というかそんな目は、大変私好みだった。

筋肉質な細っこい肩も、小さな腰も、スラッと長い足も全て、私の好みらしい……

私はゆっくりと目を閉じた。

一時間目を告げるチャイムがやけにばやけて聞こえてくる。

眠い……

確か一時間目は、鼻っから受ける気のない数学だったはず。

私の意識は心地よさを感じながら、だんだんと薄れていった。

私は、それから何度か目を覚ましたが、寝たふりをした。
実際眠たかったし、それに起きるのがめんどくさかったのだ。

そんな私に話しかけようとする者は誰もいなかった。

そのまま、チャイムは放課後であることを告げた。

すっかり静寂に包まれた教室は、あどけない寂しさを漂わせており
私がそつ、と顔をあげると辺りは若干の薄暗さに包まれていた。
窓から入り込む夕日が当たりをボンヤリとしたオレンジに照らし出
し、

落ち着いた雰囲気醸し出していた。

こういうの、いいなあ

なんて思っていると

「やっと目、覚ました？」

突然後ろから掛けられた声に、私の肩はビクツと跳ね上がり
身体は、反射的に後ろを振り向いた。

教室内には誰もいないと思っていたのに・・・・・・、この声。

「青崎さん一日中寝てるんだもんない。」

そう言って、照れたように笑っているのは、大野トモキだった。
大きい垂れ目が薄ボンヤリとした視界の中ららん光っている。

そんな人懐っこい大野の顔に、私の心はドキン、と大きく動いてみせた。

「・・・なんでこんな時間にここにいるの？」

私が思わず、そっけなくそう聞くと

「俺？俺は補修でさー、このプリント終わないと帰してもらえないんだとー。」

そう言いながら大野は、ポケットから教室の鍵をとりだし指にかけながら回して見せた。

俺、鍵掛けなきゃいけないんだよね、と言いたいのだろうか。

でも私はあえてスルーした、だって私はそういうキャラだから。好きな人でも何でも関係ない。

私が、チャリチャリと回り続ける鍵を見ていた視線を、夕日に移すと大野はまた、人懐っこく笑い、プリントに視線を戻した。

「つつても後2問なんだけどね。」

と、鍵をシャーペンに持ち帰る。

私は、どうか2問がまだまだ解けないでいて、と願っていた。放課後の教室に二人つきり、かなり怪しいシュチュエーションであるが

そんなことはどうでもいい。

ただ、大野とこの穏やかな時間を過ごしていたいのだ。
私にとって人生初めてかもしれない、こんな時間。
心が温かく満たされるのを、私は確かに感じていた。

私は夕日を見ていた視線をまた大野のほうに移した。
さつきより暗さがました教室では、夕日の色がより一層濃くなり
大野の頬までもをオレンジにそめあげていた。

大野の意外と長いまつげが、目の下に影を落としている。
柔らかそうなピンクの唇は、ほんのわずかに開いていた。

カリカリ、と数式を解き続ける大野の右手は動きを止めることなく
プリントの残り一問も、もう解き終わろうとしていた。

ああ、あと、Xを書いたら終わってしまう。

「終わったー!!」

心底嬉しそうな大野の声に、私の心はズキンと鈍い音を立てた。

大野は、ガタン、と勢いよくイスから立ち上がり

「これ吉川に出してくるから、鍵しめちゃうし青崎さんも出ちゃっ
て、」

そう言って、私に背を向けた。

大野の細長い影が教室の中を駆け抜け、扉へ吸い込まれようとして

いた。

―― 待つて、 行かないで――！！！！

私はガタン、と勢いよくイスから立ち上がり

本当に、本能的に大野の左肩をつかんでしまった。

どうすることもできないのに・・・

大野の驚きが顔を見なくたって分かってしまう。

大野の左肩を掴んでいる、惑う私の右手は、

勝手に大野のことをイスが立ち並ぶスペースへと力一杯押し飛ばした。

無防備だった大野は、バランスを崩して・・・

ガラガラ、 ガシャアアアン

とすごい音が辺りに響き

大野は机とイスの波に挟まれ、痛そうに顔を歪めていた。

「いつてえ・・・」

と、そう呟く。

きっと私のことを変な奴、キモい奴と思いながら。

私は、なんでこんなことしちゃったんだろ、と冷静に考え
そして諦めた。私はこんなのでいいんだ、丁度いいんだ。と

すっかり夕日の沈んだ薄暗い教室で

ただ立ち尽くす私と、尻餅をつく大野。

私はクツと目を細め、大野の頬に向かって手を伸ばし、床に膝をつ
いた。

そのまま、大野に馬乗りになる。

もう、いいんだ。 どうせ

上からのぞき込んだ大野の顔は先ほどの痛そうな顔とは打って変わ
り、びつくりするほど真剣だった。

そして私の髪が触れた唇の端は、何か言いたげに口角を下げていた。

「ねえ、私としよう？ 私の噂、どうせ聞いているでしょ。」

私は拒否覚悟でそう聞いた。

むしろ拒否されることを望んだのかも。

私って馬鹿だから、大事なものは傷つけちゃうんだ。きっと。

大野は、まっすぐに私の方を見たまま、

私を払いのけることも、言葉で拒否することもせず。

ただ私の下に 居た。

静寂が、時を刻む。

「嘘つき。」

大野はまっすぐに私の瞳を瞳を見つめたまま、そう言った。

不意打ち、あまりに不意打ちだった。

まだ静寂の中、漂っているかのようなその言葉に

私は思わず涙をこぼした。

私はあまりにも脆い、そして弱すぎる。

それは、誰も私を見てはくれないから？

大野は静寂を破るように、いきなりガバツと上半身を起こした。

そして、バランスを崩した私をぎゅっと抱きしめた。

大野に何が分かるっていうんだ、と自分勝手な私は心の中で悪態をつきながら

けれど嬉しく、暖かく ぼろぼろ涙をこぼした。

もしかしたらこの暖かさは嘘かもしれないのに

私はそれにしがみついた。

（後書き）

大変分かりづらい文章ですが、

女の子の心境を感じ取っていただけたら幸いです

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7866p/>

寂しさを埋めてよ

2011年10月8日11時53分発行